

改訂版 富雄川流域の「饒速日命」ゆかりの神社を訪ねる (2015年10月13日)

饒速日命の出自

天照大神は縄文時代からの高天原の一族で、この国を統治すべき正統なる神の一族であった。その一族の女王となつてから、息子たちを各地の統治に派遣した。大国主に国譲りさせた後、次男の天穗日命に出雲の統治を託した。後に出雲大社の祭祀者として出雲国造の祖となる。日向の地を担当したのが天穗耳命の子、すなわち天照の孫にあたる瓊瓊杵命で三種の神器（勾玉・鏡・草薙剣）を与えて派遣した。瓊瓊杵尊の兄、饒速日命には瑞宝十種を与えて大和の地の統治に派遣した。

饒速日命の降臨伝説

饒速日命は天照大神の孫で瓊瓊杵尊の兄にあたり、大神の詔を受けて高天原より豊葦原中国に降臨された。大神から呪力を持った瑞宝十種を授かり、32人の将軍（子息・天香語山命など）と25人の物部氏族（肩野物部、鳥見物部など）、船長や水主などの大部隊での降臨である。天の磐船に乗って河内国河上哮ヶ峰（いかるがのみね：現在の生駒山）に天降り、その後、鳥見白庭山に遷られた。土地の豪族である長髓彦の妹・三炊屋姫を妃とされ、長髓彦と共に大和・河内地方の開拓に着手された。饒速日命は長髓彦と共に神武の侵攻軍と激しく戦ったが、最後は義兄長髓彦を殺害して神武に帰順した。

（メモ：饒速日命一行は難波に上陸した後は枚方まで入り江となっていた淀川、天野川を遡り交野市私市の磐船神社の哮峰に達したと思われる。）

神武東征と饒速日命・長髓彦（日本書紀（巻第三 神武天皇・神日本磐余彦）の記述）

・神武は東征出発に際して塩土の翁に聞くと、『東方に良い土地あり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐船に乗って飛び降った者がある。思うにその土地は大業を広め、天下を治めるに良い所で、きっとこの国の中心地であろう。その飛び降った者は饒速日という者である。そこに行って都を造るにかぎる。』

・「皇軍は生駒山を越えて中つ国に入ろうとした。そのとき長髓彦はそれを聞き、『天神の子がやってくる訳はきっとわが国を奪おうとするのだろう。』と全軍を率いて孔舎衛坂で戦った。」

・「皇軍は（熊野から大和に入って長髓彦軍と）戦いを重ねたが、なかなか勝つことが出来なかった。そのとき急に空が暗くなり雹が降ってきた。そこへ金色の鵄が飛び来たり、天皇の弓の先にとまった。その鵄は光り輝いて、雷光のようであった。このため長髓彦の軍勢は力戦できなかった。長髓彦とはもと邑の名であり、それを人名にした。皇軍が瑞兆を得たことから、時の人は鵄の邑と名付けた。いま鳥見というのは訛つたものである。」

・「長髓彦は使いを送って天皇に言上し『昔、天神の御子が天の磐船に乗って天降ら

れました。櫛玉饒速日命といい、我が妹の三炊屋媛（みかしきやひめ）を娶って子が出来ました。名を可美真手命といいます。それで手前は饒速日命を君として仕えています。いったい天神の子は二人おられるのか。どうして天神の子と名乗って人の土地を奪おうとするのですか。手前が思うにそれは偽物でしょう。』

・「天皇は言われた。『天神の子は多くいる。お前が君とする人が本当に天神の子ならば必ずしるしの物があるだろう。それを示しなさい』と。長髓彦は天皇に饒速日命の天羽羽矢とかちゆき（矢の携行籠）を示した。天皇はご覧になって「偽りではない」といわれ、自分の天羽羽矢とかちゆきを長髓彦に示された。長髓彦はその天神のしるしを見えますます恐れ畏まったが、戦いの用意はすっかり構えられ、途中で止めるのは難しい。そして間違った考えを捨てず、改心の気持ちはない。饒速日命は、天神と人とは全く異なるのだということを教えても判りそうもないことを見てとり、彼を殺害して部下たちを率いて帰順された。これが物部氏の先祖である。」

（メモ：古事記では登美毗古を平定した後、邇芸速日命がやって来て「天津神の御子が天降りされたと聞いて、後から追いかけて天降りしたものです」と言って印を差し上げて家来となった。とあり重要な相違である。）

橿原宮での神武天皇即位に際して、饒速日命の息子「宇摩志麻治」は、天照大御神からもらった大和統治権の印「瑞宝十種」を初代天皇神武に献上した。この瑞宝はその後崇神天皇によって、石上神社に遷されて布留大神として祭られている。これが石上神宮の創起である。垂仁天皇になってから祭祀氏族として物部連の姓を賜った。

「先代旧事本記」について

1. 「先代旧事本記」の饒速日命の記述は、「日本書紀」よりも、詳しく記載されている。
2. 平安時代朝廷主催の、「日本書紀」講読会（日本紀講読会）で聖徳太子が編纂した「記紀」よりも古い日本最古の一級史書として登場した。長くそれが信じられてきたが、近世になって本居宣長が明確に偽書であるとした。しかし、古代に創建された神社の由緒沿革、古代豪族の系譜・伝承、物部氏の間には伝えられた饒速日命の「古伝承」など、「記紀」に記載のない部分が多くあり、その価値が認められることとなった。
3. 内容は「記紀」の記事を多用しているところから、「記紀」の成立より以降、9世紀平安時代初期に物部氏の子孫、明法博士・興原敏久（おきはら）によって編纂されたとされる。
4. 全10巻からなる。巻第三（天神本記）には素戔嗚命の孫・饒速日命伝承が書かれており、巻第四（地神本記）は饒速日尊の御子、天香語山命と宇摩志麻治命の系譜。巻第五（天孫本記）は饒速日命の神裔の系譜が書かれている。
5. 神武天皇の皇后は饒速日命の娘「伊須気依姫」（亦の名は踏鞴（たたら）五十鈴姫）

としている。息子の「宇麻志麻治」の孫は、2代綏靖、3代安寧、4代懿徳の皇后となり、以降9代開化天皇までの皇后はすべて子孫から出している。

(メモ：当時は饒速日命の神裔氏族の勢力がいかにか偉大であったかが窺われる。しかし天孫族の物部氏は崇仏派の蘇我氏に敗れてから、宮廷祭祀権や饒速日命の伝承も抹殺されていった)

6. 近年研究が進んで昭和60年には国の重要文化財に指定されるなど、その価値は再評価されている。

磐船神社（大阪府交野市）

祭神：天照国照彦天火明櫛玉饒速日命（アマテラスクニテラスヒコアメノホアカリクシタマ）

ご神体：命が乗ってこられた「天の磐船」といわれる高さ12m、幅12mもある舟形の巨大な磐座。磐坐信仰。

当社は大阪府交野市南端、生駒山系の北端にあり河内と大和の境に位置している。境内を流れる天野川は10kmほど下って淀川に注いでいる。この天野川に沿って古代の道が出来、後世には「磐船街道」と呼ばれていた。

当社は天孫・饒速日命が天の磐船に乗って降臨された地で、「河内国河上哮ヶ峰（いかるがみね）」と呼ばれている所にある。古代での祭祀は、饒速日命の子孫である交野に在住した肩野物部氏によって行われてきた。物部氏の本宗家が蘇我氏に倒されると祭祀も衰退するが、当社を総氏神としていた私市、星田、河内田原、大和田原などの4村が引き継いだ。平安朝になると航海の神である住吉神社の住吉信仰が広まり、当社もご神体「天の磐船」のそばの大岩に住吉四神が祀られた。「住吉大社神代記」に膽駒（いこま）神奈備山、北限饒速日山」という記載があり、住吉大社の所領の如く記載されている。鎌倉時代には住吉神社の本地仏として、その大岩に大日如来・観音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩の四石仏が彫られている。岩窟は無数の巨岩が天野川を覆いつくし、その隙間を行場として修験道生駒北陵の古代から続く霊場とされてきた。

石切劔箭神社

祭神：饒速日命とその御子・可美真手命の二柱。境内の神武社には神倭磐余彦命奉祭

饒速日命は神武天皇の東征に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり、大和建国の任務を受けて「天の磐船」に乗り、哮ヶ峰（現在の生駒山）に天降った。

そのころ大和地方にはすでに強大な勢力を持つ先住の長髓彦一族が支配していた。そこで命は長髓彦の妹・三炊屋媛を娶り可美真手命（うましまたて：宇麻志麻治尊）を生んだ。

神武東征軍との激しい戦闘を重ねるが、饒速日命と神武はお互いに「天羽羽矢」（あめのはばや）を示し合い、共に天照大神の子孫であることが判明する。しかし長髓彦はあくまでも抗戦したため、これを誅し神武に帰順した。

社殿は足利時代に兵火で社殿や宝庫が焼失したが、「延喜式」神明帳の中には当社の名が見える。本社の祭祀は代々、古代天皇に仕えた物部氏の最有力氏族「穂積氏」（現、

木積氏) が司ってきた。その祖先である饒速日命、可美真手命を祭神として奉祭されている。

(メモ：妃の三炊屋姫は近鉄石切駅より山手の石切神社上之社に祀られている)

登彌神社 (通称 木嶋 (このしま) 大明神)

祭神：東本殿 高皇産霊神 (たかみむすびのかみ) ・ ・ 万物造化の神 皇祖神

誉田別命 (ほむだわけのみこと) ・ ・ 八幡神

西本殿 神皇産霊神 (かむむすびのかみ) ・ ・ 造化の神

登美饒速日命 (とみのにぎはやひのみこと)

天児屋根命 (あめのこやねのみこと) ・ ・ 春日明神 計 22 柱が合祀

慶雲 2 年 (704 年) 枚岡明神が春日遷幸の折、当地で休息された縁で、和銅年間に春日明神を勧請したとあり、奈良朝のかなり以前に既に創建されていたという。徳川時代の旧記によれば、神域は九町に及び、春日大社の一の鳥居も移されていたとある。

当社の由緒は遠く神代にまで遡る。この地方は長髓彦が天孫・饒速日命を奉じて勢力を広げていた。日向より東征してきた「神倭伊波礼毘古命」は苦戦するが奇しくも金色の鵄 (とび) が飛来して命の弓の先にとまり、長髓彦の軍勢は目がくらみ戦闘不能となった。地名の登美・鳥見は鵄が訛ったもの。後に饒速日命の子孫である登美連が、ゆかりのこの地・白庭山に命と併せて天神地祇を祀ったのが当神社の創建であるとしている。文政 3 年 (1802 年) に社殿は焼失している。

ご神体の木彫は 1120 年ごろ方丈 (住職) であった俊恵法師が河内の仏師に御神像を作らせて奉納せりと伝えられている。

矢田坐久志玉比古神社

祭神：櫛玉饒速日命・三炊屋媛神 本殿：春日造。重要文化財指定

饒速日命は亡くなられてから櫛玉 (神秘的な力を持つ魂の意) の尊称を奉られ、櫛玉または櫛甕玉 (くしみかだま) 饒速日命という。

創建年代は不詳であるが、6 世紀前半までは物部氏の崇敬篤く、畿内随一の名社として栄え、社殿は宏壮美麗を極めたと伝えられる。

「天磐船に乗りて大空を翔び行けり」の古事に基づき、航空祖神として航空関係者の崇敬を集め、9 月 22 日に航空祭が行われている。楼門のプロペラは昭和 18 年大日本飛行協会から、中島飛行機 (富士重工の前身) 製造の陸軍 91 戦闘機のもので奉納された

饒速日命は豊葦原中つ国平定のため、天照から十種の神宝と天羽羽矢を授けられ、三十二武将と 25 部の物部 (軍隊) その他船長や船子など、従者の大軍を引き連れて天磐船に乗って降臨した際、天空を飛翔しながら三本の矢を射ち、矢の落ちた所を宮居と定めた。一の矢は神社南方 500m に、二の矢は境内に、三の矢は神社北方 500m に落ちた。このことから社号を「矢落大明神」と称し、この地を「矢田」と呼ぶようになった。

初めに河内国の哮ヶ峰（生駒山）に天降り、その後大和の鳥見の白庭山に遷り住んだとされている。

饒速日命と共に降臨した一族の 32 供奉衆はこの地に定住し、命の没後御霊を安めるために社を建て祭祀を行ってきた。毎年 1 月 8 日に神域全面に雄・雌龍の大綱を掛ける「綱掛祭」を行い、命への永遠の側近警護を誓い、子孫の繁栄と豊作を祈っているとのこと。また氏子で宮座を結成し、境内の「舟入神」と称する天の磐船の欠けら石に縄を巻き付けて、お互いの出自を確かめ合っているという。

（メモ：後にこれらの人たちが、大和朝廷を支える豪族あるいは庶民の祖先になったとする。）

丸山古墳 （近畿最大級 86m の円墳）

昭和 47 年「若草台住宅」造成に際して、檀考研が発掘調査した。被葬者はこの辺りの伝承に結び付けて物部氏ではないかとしている。明治 12 年ころ盗掘され、本物の魏鏡「三角縁神獣鏡」4 枚、装身具の管玉、腕飾り、斧形石製品など多数出土した。大部分が祭祀用具や装身具であり、弥生時代の「呪術的副葬品」といわれている。重要文化財として天理大学および京都国立博物館に収蔵されている。副葬品からみて弥生時代末期の王級の女性の墓で、魏志倭人伝にいう径百余歩の「卑弥呼」の墓と推測される所以である。

（メモ：「三角縁神獣鏡」は黒塚古墳で 33 枚、京都の椿井大塚山古墳で 32 枚出土したが、いずれも副葬品は甲冑、刀剣、鉄鏃など武具であった。）

富雄川流域には戦前の学者調査による下記の伝承地が点在する

伝饒速日命の墓碑	生駒市総合公園付近
神武聖蹟碑	神武東征の「最終戦争勝利の地」 バス停「出垣内」付近
長髓彦の軍陣碑	白庭台団地白谷付近。
金鷄発祥の碑	学研北生駒駅北側
真弓塚	天照から拝領の天羽羽矢が埋められたという。真弓 3 丁目内
伝承邪馬台国想定地	矢田坐久志玉比古神社北 500m 付近

郷土史家、前川一武氏の著書「邪馬台国とは何か」邪馬台国・富雄川流域説の根拠

1. 神武侵攻前にすでに天孫族の饒速日命は長髓彦と共に生駒周辺を支配していた。
2. 倭国において魏志倭人伝にも認知されていた 4 世紀以前の国とは邪馬台国しかない。
3. 長髓彦を倒して東征が完結したことは、長髓彦が邪馬台国を統治していたことの証明。
4. 神武軍と長髓彦軍が戊午（つちのとうま）の 12 月（358 年）に最後の決戦の時、金色の鵝が飛来したのが富雄川流域の現在の地名「鳥見」「三碓（みつがらす）」である。
5. 生駒山周辺の多くの神社に饒速日命が祭られている。長髓彦王から国を継承した故である。

6. 卑弥呼の墓は「箸墓古墳」とされているが、3世紀の邪馬台国は魏志倭人伝によると大変不安定な時代であり、そのようなときに築造するには箸墓はあまりにも巨大すぎる。丸山古墳は「経百余歩」実測 86m は西日本最大の円墳であり、卑弥呼の墓にふさわしい。

7. 天野川、富雄川、龍田川の水源があり、邪馬台国の人口を養える稲作に適した豊かな土地であった。

8. 生駒山周辺には、往馬神社、磐船神社、登弥神社、矢田坐久志玉比古神社、南河内郡の磐船神社、石切劔箭神社、弓削神社など饒速日命を祭神として祭っている。

(文責：中井弘)

参考文献

- ・「邪馬台国とは何か」前川一雄
- ・「危険な歴史書」先代旧事本記の成立 齊藤英喜
- ・「先代旧事本記訓註」大野七三
- ・「古代史読本」
- ・各神社のしおり
- ・ネット検索など